

ものは普通児より天才児に多く、見たままの感じや形態的なものや定義と関係のないことをいうものは普通児に多かった。また普通児は知能年齢即ち生活年齢が五歳と六歳ではその定義の内容に進歩がみられるのに、天才児では知能年齢五歳と六歳でその内容に余り変化がみられなかった。ものの比較のしかたは、全般的に天才児の方が高度であることがわかった。またいろいろの角度から比較を考えているものが天才児に多いという結果も得た。生活場面での適正な判断(分別)のしかたは、はっきりした差はみられなかったが、普通児の方が適切な解決法をのべているばあいが多く、天才児は積極的に解決しようと考へてはいるが対策が単純なものが多かった。

以上のことから同じ知能年齢でも物の定義、比較のしかたなど内容からみると天才児の方がずっと高度の考へ方をしていゝこと、普通児より天才児の方が多角的なもの考へ方をしていゝこと、普通児は知能年齢が大きくなるにつれてその内容も徐々に高度になるものが多いのに天才児はそれがあまりめだたないということなどがわかった。(大会発表論文抄録64―67頁)

知的優秀児の特性に

関する基礎研究(第六報告)

(一事例による行動分析と追跡を中心として)

東京家政大学 森 重 敏

上原万里子

伊藤 礼子

目的 従来の基礎研究の一環として、われわれが扱った問題児としての一優秀児の発達、行動、およびその変容過程を追求し、指導上の一手がかりを見出すとともに優秀児一般の特性研究に対する一事例を検討する。

手続 [I]問題の生起 論文抄録に記載したように、J・Oが五歳六か月の時、われわれの児童相談所へ来所した両親の訴えに始まる。いろいろな反社会的行動のために皆に嫌われてそれまで二か所幼稚園をやめ、近所でも同様な理由で遊び相手を失ってしまった。

[II]基礎資料の蒐集 (1)面接記録による家庭環境、生育歴 (2)母親の日記(Jの質問記録) (3)幼稚園での観察記録(時間見本法) (4)同園での身体的、心理学的検査の結果 (5)卒園後の追跡的資料。

結果の概況 (図1、2、表1、4は大会発表論文抄録62、64頁を参照されたい)

[I]相談時の診断と指導 WISC知能診断検査の結果、IQ一五九で知的優秀児と診断、できるだけ知的刺激を軽減して理解ある幼稚園へやることを指示したが、親の希望で四月より本学の付属幼稚園の年長組へ入り、家庭の協力を得てJの研究と指導を行なった。

[II]事例研究の結果 (1)家庭環境——父(33才)は東大大学院出身で某私大勤務、母(29才)は旧制高女専攻科卒で親子三人、児童中心でJのために住居を三遷した程の教育熱心、しつけ態度も理的で自主性を重視するが知育面への比重大。(2)生育歴——始歩期は一三か月、特記すべき病歴なし。(3)身体状況——外見丸顔で幼児らしい形態、体格普通。小さい身長割に胸囲大、運動能力は懸垂を除いて一般に普通以下(抄録表2・図2)であるが、打叩検査成績は最高(抄録表3)。(4)知能状況——先述のほか田中ヒネー法でIQ一七五(最優)。(5)人格的特性——全般的に明るくユーモアに富み人なつこ

いが、仲間にとけこめず、甘えん坊で泣きやすく、発表力旺盛、理屈や、自意識過剰な面もある。知的遊戯、科学的方面に強い興味をもち、二歳ごろから文字を覚えて読書に熱中、音感はきわめてすぐれていた。(6)性格検査結果——(1)C・A・Tを通じて、生活の中心が家庭にかたより、両親とくに母の圧力大きく、行動には自己防衛機制がよく働き、交友関係に積極性乏しい。(2)向性検査は母親による評価で向性指数一三三(準外向)、教師による評価も殆んど同様。(3)幼児性行評定尺度によると一般に好ましい特徴件数が多いが、評定者(親と教師)間に相当な見解のずれがある。(表4) (7)Jの質問は内容きわめて高度で多岐にわたり、活潑。(8)観察記録により、諸種の行動特性、不適応行動、およびその変容過程が見出された。

〔Ⅲ〕変容過程 一年間の在園中、概ね反社会的・非社会的行動↓消極的孤立化傾向↓妥協的適応の過程をたどり、卒園(三三年三月)頃には一応の適応が見られるようになった。

〔Ⅳ〕追跡研究の結果 卒園後T学園へ入学、現在小三年のJを親・教師を含めて調べた。(1)母親は固定的な友人ができてよく遊ぶようになったというが、交友調査では本質的にやはり孤立的存在である。(図3・4) (2)基本的欲求検査結果にもこの傾向が反映し、所属参加・社会的承認・罪をさけたいとの欲求が、また全般的に学校と社会場面での欲求が非常に強い。(図5) (3)性格興味型検査では、優秀児としての一般的傾向を示す。(図6) (4)ロールシャッハ検査では知的優秀性のほか、内外の刺激に鋭敏で人格的要求による再構成化の傾向大。(5)性格特徴検査並びに性行評定尺度による親教師間の評価のずれはかなり大。(抄録表5) (6)学業成績は一般に優れているが、社会・図工・体育は普通。

図3 だれとならびたいか(昭和34.5.19)

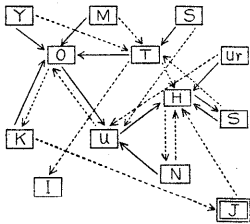


図4 だれと遊びたいか (昭和34.10.15)

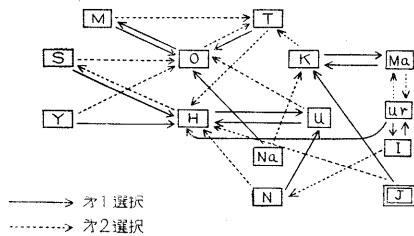


図5 基本的欲求検査の結果

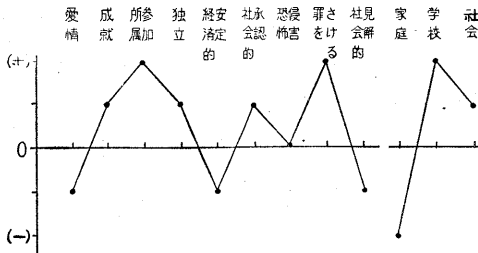
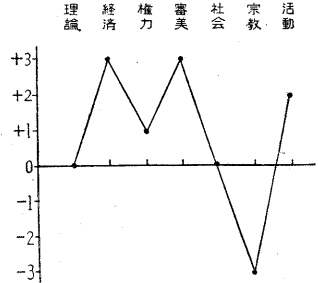


図6 性格興味型検査結果



結論 Jは知的優秀児であるとともに、とくに交友関係での問題児である。この社会的不適応性の点で、人格発達の優れた知的優秀児一般の傾向からはみ出た一類型をJ児に見出し得た。将来的予測は困難であるが、親子関係の反省的調整如何によるところは大きい。価値ある指導助言のためにも、なお今後の有効な事例研究が要請される。(大会発表論文抄録62—64頁)

Finger-painting について (8)

(吃音を主訴とする幼児の)

遊戯場面における指絵)

大阪市立大学 並河 信子
大阪市教育研究所 山田 聖子

本症例の生育歴、問題とその背景、家族構成、行動像及び母親の Counseling 等についての詳細は一九六〇年、大阪市大紀要児童学記載の山松質文氏の「幼児の吃音者の心理療法の経験」を参照していただきたいと思う。

目的 吃音の治療にあたっては微候の解消だけでなく、人格の転換をめざすべきと考え、幼児吃音者にアックスラインに準じた児童中心の非指示遊戯療法を試みた。指絵は診断と治療(特に心因性の問題を有する幼児)に役立つて媒材とされているので、その意味において遊戯場面に指絵の導入を試み、指絵活動の変容過程の分析及び指絵活動の遊戯治療場面における地位について考察した。

問題 本症例は連発性と難発性型の混合型の吃音で、受付時四才二か月の男児で在園中、家庭の人的構成は父母・祖母・弟及び女中で、

父母及び祖母とも過度の保護と干渉を示し、特に父親のそれは病的である。生育歴及び吃音発生については、満期安産で二か月で離乳、身体及び精神発達における異常及び既往症はみられない。三三年四月八日三年保育年少組に入園、同二日弟誕生、翌五月から吃音発生、但し治療場面における随伴運動は認められない。智能テストは施行していないが正常とみられる。なお本児が弟に対する敵意は外面的には認められない。

手続き及び方法 材料として指絵具赤黄緑青茶黒紫及び白色の八個のつぼと五四センチ×三八センチの白画用紙を遊戯室の中央の机の上におき、タオル、水おけを添えた。その他、室内には砂場、洗面所、学内電話等があり、各種遊具が準備され自由に使えるようになっている。破壊及び持ち帰りの禁止以外は幼児の自由にまかせ指絵についても特に指示は与えていない。

研究員の担当は母親の Counselor に山松、子どもの Play therapist に並河、遊戯場面の Observer に山田、治療時間の後三名で批判、討議及び記録を行なった。このケースは現在も継続中である。

結果とその考察 I、指絵活動の変容過程。まず量的に考察すると一年半足らずの継続期間のうち、指絵は最初の二か月はよく使われ次に混色を中心とする指絵具の遊びが約三か月描画に先だつて行なわれ、次の約二か月は play 時間内の始めと終り頃と砂場遊びの前後に指絵がなされ、やがて使用時間が短くなり、ちょうど満一年位、五才二か月頃全くやめている。今後これが続けてゆくと変るかも知れないがローエンフェルドが「四才までのなぐり描き期の適応性の悪い幼児に向いている」といっているのうなずける気がする。

これを他の遊びと比較すると、砂遊びは寒い季節の他は一年中なされておき、他の描画材であるクレヨン画及びその応用遊びは指絵に